
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ〜全てを見通す氷の目〜

【Nコード】

N6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら「キセキの世代」によって目立つことのなかった存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言う。ならば私はこう言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いです、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超え、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

「I」が「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

”誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が

一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた”

そしてもう一つ、

”公式の試合においては目立たず
華やかな記録が有るわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた”

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれないがご容赦ください。

「わー……」(前書き)

短いですが1話目投稿です。

「じわーーーー!!」

―私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活動勧誘の
声飛び交っていた。

「ラグビー興味ない?!」

「日本人なら野球でしょ!」

「将棋とかやったことある?」

「水泳!チヨーキモチイ!」

手当たり次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん?ラッセル車持ってこい!それかブルドーザーでガーツ
と!」

「10分で5mも動けねえ…。ってか、キレすぎだろ」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。

…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした
効果はなかったが。

「勧誘か・・・くだらない。部活動とは自分からやろうという気持
ちがなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のな
んと無駄なことか。」

聞こえていたら印象が悪くなりそうなセリフを平気でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。

白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃんけ怖すぎて誰も近づくものはい
なかった。

「バスケットはどこだ・・・」

「バスケット部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは・・・出身中学と動機？」

「あ、そこら辺は任意だからどっちでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まった入部届を数えていた。

「つと：今10人目か。もうちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張って有望そうなの連れてきてよねー）」

「連れて・・・きました。」

と、思った直後男子部員が1人泣きながら帰ってきた。

「（連れて・・・これとるやんけー?!しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力!!こいつ何者!?)っで、知ってると思うけど・・・」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によって遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動揺しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ!?!本場仕込みってワケ。火神大我君か、タダ者じゃなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ...?志望動機はなし...?」

その呟きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどこも一緒だろ。」
そう言い捨て火神は去っていった。

「すみません、バスケ部のブースはここでいいのでしょうか？」

「・・・あっ！ごめん。そうよこ、こが・・・」

そうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たときたん声のとぎれる。

「（こわーーーー！！）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願いします。」

「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「こわーーーー！！あれで新入生！？」

「（虎の次はオオカミか。猛獣使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるっすよ。」

「え？あ、ごめん、ありがとう」

そう言われ紙を受取りつつ名前を確認するとそこには”黒子テツヤ”の文字。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」
と、不思議に思いつつ紙に目を通していきある1点で止まった。

「って帝光バスケット部出身！？って、さっきの白髪も！？今年1年つてことはキセキの世代の！？」

「さっきのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイ！？」

先輩に騒がれているとは露知らず渦中の1人である黒子テツヤはあ
る場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」

「すみません。」

お互いに口数が多いとはいえない2人。しばらくにらみ合って、最
初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケットを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭にでたものだ。この新設校でおまえの新しい光
を見つけられるとでも？」

「……」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせず安堵している。
これからともに頑張ろうじゃないか。」

「はい、よろしくお願いします。」

「ではまた明日。」

「さようなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじっとその場を動かないで、頭の中ではいろいろ
と考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだろう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだろう
だけどなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘
はきていたはずだ

僕と同じ考え？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
とっていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだろう。そう結論付けて帰路につい
た。

「バスケットブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男
子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思ってるこ
とじゃん。」

「そうなんだけど・・・」

「あれ？こういう考え持つてる奴って好きじゃなかったっけ？」

「なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄にはこう書いてあった。

「完全な勝利を手にするために」

くNGシーンく

「ええっ!?!」

「うおっ!?!なにになに!?!」

「ねえ、これどう思う?」

「なにになに・・・」「誠凜の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ!?!意外とロマンチスト!?!」

「しょうもない運命だわね・・・」

「わー！ー！ー！ー！ー！」（後書き）

いかがでしたか？感想もらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月23日05時47分発行